

泌尿器科学

科目責任者：釜井隆男（泌尿器科学）

I. 前文

腹腔・泌尿器領域には、腹腔内臓器の他、後腹膜臓器（例：副腎、腎）と外性器（例：陰茎、精巣）が存在する。腹腔内臓器は、ひとたび腹腔内に到達すれば確認は容易だが、後腹膜臓器は脂肪組織等に覆われており、確認はおろか到達も容易ではない。なお、後腹膜臓器の多くは大血管同様、体幹深部に位置しており、これら臓器へ到達するには、体内構造の理解と手術時の慎重操作が求められる。

また、泌尿器科領域には内分泌（副腎、腎、精巣）、排泄（腎、膀胱など）および生殖器官（前立腺、精巣など）が跨っており、とてもユニークな領域である。これら各器官の働きについても解説する。

II. 受入可能人数

人数は制限しない。

III. 担当教員

科目責任者：釜井隆男（泌尿器科学）、指導担当教員：木島敏樹（泌尿器科学）

IV. 学習内容

<授業の具体的な進め方>

臨床医（肉眼、画像、体腔鏡、内視鏡、顕微鏡）から見た解剖について解説する。

<授業計画>

第1週 インTRODクシヨN：腹腔内臓器・後腹膜臓器について

第2週 対称臓器、非対称臓器について

第3週 内分泌器官として副腎、腎臓を知る

第4週 排泄器官として尿路（腎、尿管、膀胱）を知る

第5週 生殖器官として男性生殖器/外性器を知る

第6週 期末試験

V. 学修の到達目標

今回の講義では、臓器または疾患に対する各種画像所見、手術時の臓器到達法を知ることが主な学習目標としている。特に後者については、動画等、視覚的要素を多々織り交ぜて、理解が進むよう工夫している。このように、臨床と解剖、両者を織り交ぜ、これらを無理なく理解することで、医学への好奇心、また未知の領域を知る喜びが得られれば幸いであり、そのことが授業のねらいである。

VI. 成績評価の方法・基準

期末試験を行い、総合的に評価する。4回以上出席しないと評価の対象としない（単位を取得できない）。

VII. 使用する教材・資料など

<教科書・参考書・教材と入手方法>

講義では教科書・教材は使用しない。必要に応じて随時プリントを配布する。

VIII. 質問への対応方法

e-mail（木島敏樹：tkijima@dokkyomed.ac.jp）や電話（泌尿器科学：0282-87-2162）で予約を取ってから、質問や相談に応じる。

IX. 求められる事前学習, 事後学習

各講義では、講義冒頭にプリントを随時配布する。このプリントによって、事前学習（予習）、事後学習（復習）、各々10分程で知識の整理ができる。

X. コアカリ記号・番号

D-7-1) (消化器系の構造と機能), D-8 (腎・尿路系), D-9 (生殖機能), D-12-4) - (4) 副腎皮質・髄質疾患

XI. 課題（試験やレポート）に対するフィードバックの方法

試験結果を分析し、一授業あたりの理解度を分析する。理解度が低いと思われる内容については、必要に応じて学生へ周知、また授業内容の修正を行う。

XII. 卒業認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

*◎：最も重点を置くDP ○：重点を置くDP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能, 種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い, 他者に説明することができる。	◎
	種々の疾患の診断や治療, 予防について原理や特徴を含めて理解し, 他者に説明することができる。	○
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け, 正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け, 患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け, 患者やその家族, あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	◎
	書籍や種々の資料, 情報通信技術 (ICT) などの利用法を理解し, 自らの学修に活用することができる。	○
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち, 専門的議論に参加することができる。	○
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち, 実践することができる。	○
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し, 自らの行動に反映させることができる。	○
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け, 自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け, 他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け, 他者との関係においてそれを活かすことができる。	